

## 20 最後の殉死

数年まえのことラージプート諸王国の一族の王が死んだ。もし大門が閉ざされていなければ、王妃たちは宗主国イギリスの殉死禁止令を無視して宮殿を抜け出し、王の遺体とともに焼身自殺を遂げたことであろう。しかし一人の王妃は亡き王のお気に入りの踊り子に身をやつして警護の列を潜り抜け、火葬の火に近づいた。でも燃えさかる炎におじけづき飛び込むことができなかった。そこで傍にいた親戚筋にあたる貴族に殺してくれと頼んだ。その貴族は彼女の正体を知らず願いを聞き入れ、王妃を殺した。

ガングラ丘陵の城では

ウダイ・チャンドが死の床についていた

一晩中 鐘が鳴り響いていた

死に瀕したラージュ王の魂<sup>たましい</sup>を送らんと

一晩中 後宮からは

5

女たちの号泣が絶えることがなかった

一晩中 城外を警備する貴族たちが

右往左往していた

一晩中 かがり火から青白い光が 宮殿の庭で

ものもしい音を立てるウルワルの剣や トンクの小銃を

10

メワールの馬具や マールワールの鎧を

照らしだしていた

宮殿の一番上の黄金の間では

一晩中 王は今生最後の息を求め喘いでいた

<sup>とぼり</sup>帳の奥からは女官たちの忍び泣きの声が漏れていた

15

姿は見えねど女たちの衣擦れや囁き声が聞こえた

そして王と死をともにできない

ブーンディ王妃の物狂おしい眼が光っていた

明け方に王は逝<sup>えし</sup>衛士<sup>た</sup>った 逝去を知らせる狼煙<sup>のろし</sup>が

尾根から上流へと

20

マルワ平原からアブの峻<sup>しゅん</sup>険<sup>けん</sup>な断崖へと伝わった

不気味に閉ざされた後宮の扉の背後から

王の死を知った王妃たちの嘆きの声が

悲痛な嘆きの声が夜明けの星屑へ登っていった

おし黙った神官たちは<sup>ひざまず</sup>跪き 王の口を閉じ 25  
茶毘<sup>たひ</sup>にふすため 衣を覆った

ブーンディ王妃はわれらの前で泣き叫んだ  
「いいな皆のもの 先の王妃たちのごとく  
王のとなり 新妻のふしどで後を追うのだ  
さあ女たちよ外へ 王を焼く火のもとへ」 30

われら<sup>えし</sup>衛士 すぐさま後宮の大門を閉めた  
王妃たちの白き手がまさに仕切りに届き  
衣に包まれた王妃たちの足音が聞こえ  
武者返しの迷路を抜け表に出る寸前  
大門のかんぬきがつぎつぎと降り <sup>えし</sup>衛士の太鼓が鳴り響いた 35  
かくて王妃たちは袋の鼠となった

太陽が昇るころ 一つの顔が城壁の上からのぞいた  
ケタケタと嘲笑が降り注いだ  
「おーい 王妃たちは皆ここで泣いている あたいを通しとくれよ  
あたいアジズンよ ラクナウから来た踊り子よ 40  
家も古くなれば ネズミも逃げ出す  
あたいどこかへ移りたいのよ

「あたい 王妃たちなんかよりずっとうまく王様をあしらってきたわ  
でも今宵はあたいのほうがあしらわたんの  
王妃たちを守ってやって あたいをここから出してよ 45  
さもないと 仕返しであたいは鞭打ち刑よ 拷問よ」  
そして踊り子は下へ飛び降り 逃げた  
<sup>えし</sup>衛士たち茫然と眺めるだけ

人ぞ知る 王は北部生まれの踊り子に  
国も傾けんとするほどのご執心ぶり 50  
べちゃこい鼻したラクナウの踊り子を神と崇めた  
女の歩いた後に土下座しキスするていたらく  
女の酒に酔った嬌態にメロメロとなり  
軽やかな巻き毛をまさぐっての世迷い文句

王の亡きがらを 太陽の子等の墓が立ち並ぶ 55

王族の廟所へと移す  
飾り柱には灰色の猿がぶら下がり  
宝石がちりばめられた<sup>どんちよう</sup>緞帳には孔雀が羽根を広げ  
また<sup>いのしし</sup>猛き<sup>ばんまよ</sup>猪が蟠踞する  
砂漠の砂の吹き溜まりに建つ王妃の廟 60

式部官が 亡き王の称号を高らかに読み上げ  
われらは積み上げた<sup>たきぎ</sup>薪に火を放った  
「今ぞ恐れる者なき親英の王よ  
ルーニーからジャイサメールを支配下におく貴き方  
ピカネール砂漠の首長よ 65  
ジャングルの王者よ 今まさに逝かれよ」

一晩中 赤い炎が夜空を突き刺した  
夜風に揺れる炎の槍となり天を焦がした  
荒れ果てた寺院から  
ベールで顔を隠した女が一人 泣きながら出てきた 70  
王の名を呼んだ だが王はすでに逝ってしまって  
女の涙などもう見えなかった

左右は静まり返った往来で  
<sup>たひ</sup>荼毘の炎のすぐ傍に控える者がいた  
狩りのときも戦のときも 常に王の側に仕えていた者 75  
抜き身をかまえて藪に潜み 山懐に猪を追い詰めた  
髪に白いものが見える年老いた貴族であった  
またブーンディ王妃の親族でもあった

この貴族は女の内心の苦悩を少しも分からなかった  
熱い想いと冷たい恐怖 80  
三度 燃え盛る炎から飛びのき  
三度 気おくれに口惜しく胸を打ち  
三度 傷ついた鳩のごと  
炎が恐ろしいと訴えた

貴族は言った 「見苦しいぞ 85  
そちの顔よりベールをとれ  
遊女のみだらな野心の赴くままに  
王と国とをわがものにしたそちのような

汚れた体を焼いたとて純白の清い灰になるものか  
跪<sup>ひざまず</sup>き 王に詫びよ」 90

すると女は言った 「汚れきったあたいの魂の真<sup>まこと</sup>にかけ誓うよ  
これまではさまさまの悪事を働いてきた  
あの炎が消える前に ご破算にしようと思ったんだ  
あたいを 王のそばに寝かせてくんない  
他の王妃が地獄で喚<sup>わめ</sup>くあいた 95  
あたい あの世でただ一人の王妃として君臨<sup>くんりん</sup>してやっから

「でもあたい 恐ろしい炎の息遣いを聞いてしまったんだ  
とても死ねやしない  
ラージプートの方にお願ひよ  
おまえさんのタークルの剣を 100  
卑<sup>なりわい</sup>しい生業<sup>けが</sup>の汚れた血で汚してくんな・・・」  
「よかろう」と貴族は応えた

貴族は剣を抜いて突き刺した たちまち刃は  
王妃の胸の下に宿る命の血潮を飲み込んだ 105  
「それがしは王妃が炎に身を投げるものとおっておった  
だがラージプートの奥方として死ぬのはこんな遊女  
あっぱれな女よ 逝くがよい 今や胸を張れ  
そなたの王とともに逝き眠るのだ」

黒く焼け焦げた丸太が 白い遺灰の上に焼け落ちた  
炎は 或は小さく或は細く 110  
殺戮<sup>きつりく</sup>の赤と 刃の青とを帯びた炎は  
二つの遺骸の頭部から足元へと ひゅーとばかり揺れ  
いま一度赤々と燃え上がった  
炎はその餌食をブーンディ王妃の心の臓に見出したがためである

(榊井幹生訳)